

違更に勝手次第に罷成候節は、元本渡方、其外取締に拘り候間、以來左之通可被仰付候哉、

一曆元本、大概年々八月御下ゲ相成候に付、當年々右前月七月、中書物掛名主江申渡、來年之曆板

行仕度相願候者は、名前書、右名主方江可差出、旨觸達爲仕、尤名前差出候而も、一向是迄板木に

不携もの、又は御寫本も相渡候ニ付、其日稼之類は相除、人數多少は、其年之振合に任、一紙請證

文取之、御寫本曆相渡、是迄之通、板行出來之刻、天文方江差出改濟、御披見曆可差出、旨申渡、其年

書上之人數之者、江商賣被仰付、其旨町觸可被仰渡候哉、

右之通、年々商賣人取調、曆板行被仰付候は、其時々之人數ニ罷成可然候哉、猶御賢慮被成下候

様仕度奉存候、依之此段申上候、以上、

寅四月

館市右衛門

樽藤右衛門

〔府内備考十三〕淺草 頒曆調所又測量所と云

右板下寫本曆、大經師彫刻摺立差出、役所に而吟味之上進達し、所々奉行領主江御渡之上、銘々板

行出來次第、九月晦日迄、校合曆差出、役所に而讀合、校合之上、不宜所は爲相直候上、早々賦曆賣曆

被申渡候様奉行相達、右曆師共へ、直し之箇所書付、校合濟之押切書付、下役添簡を以申進ス、

〔續日本紀二十〕孝謙天平寶字元年十一月癸未、勅曰、如聞、頃年諸國博士醫師多非、其才託請得選、非唯損

政、亦无益民、自今已後、不得更然、其須講略○中曆算生者、漢晉律曆議九章、六章、周髀、定天論、並應任用、

被任之後、所給公廩一年之分、必應令送本受業師、如此則有尊師之道終行、教資之業永繼、國家良政

莫要於茲、宣告諸司、早令施行、

〔續日本紀考證七〕孝謙漢晉律曆曆下當依永正本、金澤本、堀本、及三代格、議當依永正本、金澤本、堀本、

字、唐志僧一行大衍曆一周髀見天平三年定天論隋志定天論三卷、現在書目、錄亦載之、

卷、曆議十卷、即此、○中略、周髀、三月、攷證、定天論、按唐志有虞喜、安天論一卷、疑亦此、